



むかし、ある山に、一匹の白ぎつねが住んでいた。

山のふもとには、野原が広がり、秋になるとそこは一面のすすきの原になった。

あるとき、ぎつねは、すすきの原に遊びにいった。吹き抜ける秋風に、すすきの穂がさわさわと揺れ、虫たちがしきりに跳ね回る。ぎつねは虫を追いかけて夢中になって走り回っていた。

気がつくときすっかり日が暮れて、あたりはしんと静まり返っていた。山の端から、月が顔を出し、あたりをこうこうと照らし始めた。

「お月さま、こんばんは」

ぎつねは丸い月にあいさつした。

白い月の光がぎつねを銀色に輝かせる。体がキラキラ光るのが面白くて、ぎつねはぴょんぴょん飛び跳ねた。

そのとき、向こうで、ざくざくとすすきを踏みしだく足音が聞こえた。

「だれ？」

すすきの間をのぞくと、一人の若い男が歩いてくるのが見えた。

このあたりの村の者は、すすきの原があまりに奥深いので、恐ろしがって近づいてこない。それなのに、その男は怖がるようすもなく、ずんずん歩いてくる。

「なにをしにきたのだろう」

ぎつねは、そうっと男の方へ近づいた。

「このあたりがいい」

男はそうつぶやいて、鎌ですすきを刈り始めた。一本一本見定めながら、穂の形のよいすすきを刈り取っていく。

「なぜすすきを刈る？」

ぎつねの声に、男は驚いた。

「ぎつねか。こんなところでなにをしている」

「それはお前のこと。なぜすすきを刈っているのだ？」

「おっかあに見せてやろうと思ってな」

男は束ねたすすきをもちあげて、にこっと笑った。

「月がきれいだろう？ お月見をするのに、すすきがいるのだ」

ぎつねは夜空を仰いだ。まん丸な月が群青の空にぽっかり浮かんでいる。

「ここでみればよい」

ぎつねがそういうと、男は困ったように笑った。

「おっかあは足が悪い。それに、こんな恐ろしいところへは誰も来ないよ」

「でも、おまえは来た」

「ずっと前から、このすすきが欲しかったのさ。来てみたら、なんてことはなかった」

男はからからと笑った。ぎつねはなんだか嬉しくなって、ぴょんとはねた。

ぎつねの体が、月の光で銀色に光った。

「おお、見事な毛並みだな。まるでしろがねのようだ。これからお前をしろがねと呼ぶことにしよう」

「しろがね」 きつねはつぶやいた。

「おれは信太という。じゃあな、しろがね。気をつけて帰れよ」

信太は優しい声で言って、またすすきをかき分けて帰っていった。

それから、信太は時々すすきの原にやってくるようになった。

「しろがね」

信太の声が聞こえると、しろがねはどこにいても飛ぶようにかけてきた。

すすきを刈ってできた小さな空き地に信太としろがねは並んで座り、空を見たり、風の音を聞いたりした。

あるとき、空は青く晴れているのに、どこからか、さーっと雨が降ってきて、すすきと男ときつねを濡らした。

「きつねの嫁入り」

男は山を指さしてそういった。

「おまえは嫁入りせんのか」

信太はそう言って笑った。

「信太の嫁になりたい」

しろがねがそういうと、信太は優しく笑った。

「できるものなら、なってもらいたいな」

「嫁入りしてもいいのか、信太のところへ」

しろがねが首をかしげてそう問いかけると、信太はすすきを一本折り取って、ふうっと穂を吹いた。

「しろがねは、おっかあの面倒をみってくれるか」

ふわふわと漂うすすきの綿毛を見つめながら信太はつぶやいた。

「みるさ。信太のおっかあなら」

しろがねが言うと、信太はうれしそうに笑った。

「おまえはやさしいな」

信太はそっとしろがねの頭をなでた。

「待っていてくれ、信太。きとお前のところに嫁に行くから」

しろがねが言うと、信太はうなずいて帰って行った。

さて、信太には、権助という友達がいた。とても気のいい男で、いつも信太のおっかあのことを気にかけてくれていた。

ある日、権助が畑でとれた野菜を持って、信太の家にやってきた。

「おっかあに食わせてやってくれ」

「いつもすまん、権助」

「おっかあ、具合はどうだ」

権助は家の奥で寝ている信太のおっかあに声をかけた。

「ああ、おかげさまで、今日はちいと具合がいいようだよ」

信太のおっかあは足をさすりながら言った。

「ほんとは医者に診せてやりたいんだが、金がないからなあ」

信太はあきらめたように笑った。

すると、権助がぐっと身を乗り出した。

「実はな、耳寄りな話を聞いたのだ。金が手に入る話だぞ」

「いったいどういうことだ」

「山に珍しいきつねがいるらしい。そいつを仕留めて庄屋さまにところに持っていくと、ほうびがもらえるんだそうだ」

「珍しいきつね？」

信太の胸にさっと不安が走った。

「ああ。それは見事な銀色の毛並みらしい」

「なんだと」

やはりそれはしろがねのことであった。

信太の浮かぬ顔に気づかず、権助は勇んで言った。

「一緒に仕留めに行こう。ほうびはお前にやる。それでおっかあを医者に診せろ」

権助は独り決めして、帰って行った。

「しろがねに知らせてやらねば」

そうつぶやきながら、信太はじっとうずくまっていた。

そのころ、しろがねは長老のところへ相談に行っていた。

「なんとか、人間の男のところに嫁入りすることはできないだろうか」

「人間に化けて嫁入りするというのか」

長老は、難しい顔で言った。

「どうやら止めても無駄なようだな」

しろがねは強くうなずいた。

「そうか、それならしかたあるまい。おばばのところへ行って、嫁入りの仕方を教えてもらえ。ただ一つ、これだけは覚えておきなさい。葛の葉には決して触れないように」

「わかった」

しろがねは、うきうきしておばばの元へ向かった。

しろがねの嫁入りの支度は三日三晩かかった。三日目の夜、しろがねは、すすきの原で、すすきを眺めていた。明日、天気雨が降ったら、信太の元へ嫁入りする。そのことを考えるとわくわくして、眠っていられなかった。

そのとき、すすきを踏みしだく足音がした。

「信太か？」

しろがねが頭をあげたとき、ひゅっと音を立てて矢が飛んできた。しろがねはもんどりうって倒れた。

「葛の葉にも触らなかったのに」

しろがねは悲しそうにつぶやいた。

次の日、権助は銀色に輝く狐の毛皮を持って、信太の家にやってきた。

「みる、信太、この毛並みの見事なこと。これなら庄屋様がたんまりほうびをくださるぞ」

信太は震える手で毛皮を受け取った。そして、はらはらと涙をこぼした。

それを見て権助はたいそう驚いた。

「いったいどうしたというのだ、信太」

「しろがねよお。おれを許してくれ」

信太は毛皮を抱きしめて、泣き崩れた。

そして、権助に、しろがねとのことを話した。権助は深くうなだれた。

「そうだったのか。知らないこととはいえ、すまないことをした」

「いや、権助は悪くない。悪いのはおれだ。金が欲しい一心で、しろがねを見殺しにした。すまない。すまないしろがね」

信太の泣き声を聞いて、おっかあがよろよろと出てきた。

「信太。そのきつねを山に帰してやれ。わたしのことは気にせんでいいから」

「おっかあ」

信太は声をあげて泣いた。

それからしばらくして、満月の夜がきた。

信太は、しろがねの毛皮を抱いて、すすきの原へ行った。

月は山の端からゆっくりと空をのぼっていく。白々とした光が、さーっとすすきの原を照らしていった。すすきの穂先が波のように揺れた。

信太は、しろがねの毛皮を高く掲げた。

月の光が毛皮に降り注ぎ、すすきの海に白い舟が浮かんだ。

信太はゆっくり歩いた。

銀色の波の上を、光り輝く白い舟がゆらゆらと進んでいった。